

# 能勢法華の成立についての一考察

——寂照院日乾と能勢頼次を中心として——

植 田 観 樹

## はじめに

現在能勢地方には十八箇寺に及ぶ日蓮宗寺院があり、明治以降の建立になる寺院を除いては全て本満寺の旧末寺とされている。この本満寺の末寺が延享二（一七四五）年の調べでは二十二箇寺を数えるものであった（「当能勢惣門中留記」①）。しかもこれらの寺院は全て、能勢氏の支配していた地域に限られているのである。この能勢氏領内の日蓮宗は後世能勢法華と呼ばれている。

能勢法華は、寂照院日乾に領主能勢撰津守頼次が帰依したことに始まるもので、日乾の能勢来村にその端緒をみることは、古くより説かれているところである。それまでは真言宗の支配する地であったが、この後、頼次が

隠居する元和七（一六二一）年までの約二十年程の間にそのほとんどが改宗され、二十箇寺に及ぶ日蓮宗寺院が創立されて、法華一宗をもって他を圧倒するところとなる。これ以降は延享二年の「当能勢惣門中留記」をみても三箇寺しか増えていない。これは頼次の外護の力が大きかったことを示すと共に、如何に強固な法華信仰を持っていたかの証しともいえよう。この頼次と、頼次をして外護者たらしめた日乾との出遇いこそ、能勢法華の起点とも呼べるものである。

かような能勢法華の成立の過程をみることは、これを通して、教線を拡張していく日蓮教団の近世以降における姿をも見出すことができるものと存する。しかし、これを論じた研究は少ない。『艸山集』『本化別頭仏祖統

紀』等は日乾伝に止まるもので能勢一円の法華宗という観点から論ぜられたものでない。所謂日乾伝を脱した研究としては、『妙の見山』②、『東郷村誌』③、「近代における妙見信仰」④、『日蓮宗布教の研究』⑤等があるが、能勢法華そのものについて論ぜられたものではなく、ただひとつ『日蓮教団全史上』⑥において少しく論ぜられているだけである。それ故本書はこの方面での研究の出発点といえるもので、能勢法華成立のための要因を探究されていることは、本書の成果と認められる。但し本書も多くは語らず、更に追求されるべきこと、是正されるべきことは少なくない。

能勢法華成立の要因はいくつかあり、それらの相互作用によって成立していくもので、単純に割切ることとはできないが、今拙文ではその中でも最重要な二点、即ち日乾と頼次に関して検討を加えることにより、能勢法華を理解するための一助としたい。

尚、文中で日蓮宗・法華宗の名称は区別せずひろく法華宗の語を用いる。また能勢氏領は丹波国にもあったがこの法華寺院は能勢地方との交渉がみられず、「当能勢惣門中留記」にも記載なく、今は能勢法華の範疇には入れなかった。

## 一 能勢における法華弘通

寂照院日乾はいつ、どのような事情のもとで能勢へやって来たのであろうか。また、どうやって頼次の帰依を受けることができたのであろうか。以下においては、まず日乾の能勢来村の経緯を明らかにしたい。

『本化別頭仏祖統紀』日乾伝によると、

初撰之能勢行<sub>ニ</sub>請雨法<sub>一</sub>。一村治<sub>レ</sub>之隣村復<sub>ニ</sub>二日大雨<sub>一</sub>。其地造<sub>ニ</sub>請雨寺<sub>一</sub>。今呼<sub>ニ</sub>無漏山真如寺<sub>一</sub>矣。

とあり、日乾が能勢で請雨の法を修したことが判る。しかし頼次のことも説かれておらず、又能勢来村の手掛りも記されてはいない。

『艸山集』に日乾来村の様子を見ると、

元和三年春師遊<sub>ニ</sub>撰州<sub>一</sub>。能勢郡鞍懸<sub>ニ</sub>古堂<sub>一</sub>。郡主撰津守某請<sub>レ</sub>師說法<sub>一</sub>。其堂安<sub>ニ</sub>弥陀薬師二像<sub>一</sub>。弥陀偉大無<sub>レ</sub>殿。薬師在<sub>ニ</sub>宝殿中<sub>一</sub>。師將<sub>レ</sub>陞<sub>ニ</sub>座先拜<sub>ニ</sub>弥陀像<sub>一</sub>次進<sub>ニ</sub>薬師前<sub>一</sub>。当<sub>ニ</sub>三其時<sub>一</sub>乎殿扉自開<sub>ニ</sub>八字<sub>一</sub>。一会咸生<sub>ニ</sub>希有心<sub>一</sub>。感動<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>止<sub>一</sub>。

とあり、頼次の請に応じて説法したことを記している。

この「鞍懸の古堂」は後の来成山本縁寺であり、能勢における日乾の最初の趾蹟と伝えられている。更に、

初<sup>メ</sup>元和三年<sup>ノ</sup>春<sup>ノ</sup>師<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>能<sup>テ</sup>勢<sup>ニ</sup>相<sup>ミ</sup>攸<sup>テ</sup>居<sup>フ</sup>。郡主深欽<sup>ク</sup>師<sup>シ</sup>德<sup>ヲ</sup>爲<sup>ニ</sup>捨<sup>ツ</sup>其<sup>ヲ</sup>址<sup>ヲ</sup>。師<sup>シ</sup>誅<sup>シ</sup>卯<sup>ヲ</sup>而居<sup>リ</sup>扁<sup>シ</sup>日<sup>ヲ</sup>覓<sup>フ</sup>樹<sup>ト</sup>庵<sup>ト</sup>。

として頼次が元和三（一六一七）年春日乾に覺樹庵を寄せたことを述べている。なお覺樹庵は現今の真如寺に西隣して在ったと伝えられている（？）。更に請雨の修法については、

寛永三年夏大旱。<sup>ニ</sup>于<sup>レ</sup>時師<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>能<sup>勢</sup>。村民乞<sup>フ</sup>師<sup>ヲ</sup>祈<sup>ル</sup>雨。  
 村有<sup>レ</sup>潭<sup>ニ</sup>曰<sup>フ</sup>三龍淵。<sup>カ</sup>一師<sup>シ</sup>封<sup>シ</sup>咒<sup>ス</sup>投<sup>ス</sup>潭。<sup>ニ</sup>即時雨降終日一村  
 大治。但其雨不<sup>レ</sup>被<sup>ヨ</sup>於<sup>ハ</sup>外<sup>ニ</sup>。因隣村又求<sup>ム</sup>焉。師如<sup>ク</sup>先。又  
 大雨二日乃止。<sup>フ</sup>

として寛永三（一六二六）年に修せられたことになる。

二村の村民から乞われたこと等については、『仏祖統紀』と同様である。更にまた、

(寛永) 七年夏幕下  
 ニシテ  
 年而反<sup>ニ</sup>乎摂州<sup>一</sup>。  
 台徳院  
 有<sup>テ</sup>命賜<sup>フ</sup>ニ師洛妙覺寺<sup>ニ</sup>住<sup>スルコト</sup>一

とあって、寛永八（一六三一）年には能勢へ帰るとして  
いる。

『日蓮宗高僧伝』(8)では、日乾が日朝と誤って記されており、就中池上本門寺日樹の不受不施問題の後、幕命で妙覺寺を与えられた段を妙滿寺とするなど誤謬甚だしいものがある。これら信憑性は極めて低く、ついでに

言えは身延西谷より元和四（一六一八）年西上し摂津能勢に覺樹庵を築いて隠棲するという記述も、根拠なく、現存する覺樹庵の棟札（9）が元和三年のものであり、この点についても誤りといわねばならず、本書は採らないこととする。

次に『身延山史』(10) 日乾伝中能勢に関する箇所をみると、

慶長三年春能勢摂津守頼次乾師の門人然師を其邑に請す、同六年清普寺を建立す、(中略)同十年九月能勢真言宗の寺を説伏して改宗せしむ。(中略)元和三年春摂州に遊化し覚樹庵を創して之に居ること四年、(中略)同九年職を遠上に付して能勢に帰る。寛永三年夏大に旱す。村民の請に任せて祈雨するに即時大に洽ふと云ふ。(中略)同七年台命を受けて洛の妙覚寺に住すること一ヶ年、復能勢に帰る。

元和三年以降の記事は『艸山集』と全く同じ内容である。それ以前の部分については新しい記述がみられる。

ここでは元和三年以前少なくとも本書の文章構成からみれば、慶長十（一六〇五）年九月には日乾が来村していたことになる。この点『艸山集』の「初元和三年春師之能勢」即ち日乾来村元和三（一六一七）年説に対立する

ことになる。またここでは『艸山集』にない記事が目につく。慶長三（一五九八）年春頼次が日乾の門人日然を請し、慶長六（一六〇一）年清普寺を建立したことである。

まず『艸山集』の日乾来村元和三年説に対しては『日蓮教団全史上』において、

前記載の事実、諸寺開創の年紀よりみるに遅きに失するようで妥当ではない。

とされている。即ち日乾に、頼次はじめその子息達が帰依して慶長年間には寺を建てている故、元和に入ってから初めて日乾が来村することはない、とされているのである。（同書ではまた同じ理由で、請雨が寛永三（一六二六）年行なわれたとすることについても否定している。）では日乾が来村したのはいつであらうか。これについては、『日蓮教団全史上』では「慶長初年の頃」とされるだけで具体的には論ぜられていない。

次に日乾の門人日然であるが、これについては『教団全史』では全く触れられていない。更に『身延山史』では頼次が日然を請じ清普寺を建立したとして、清普寺開創に日然の功績のあることを示しているが、これについても論及されていない。ただ清普寺建立については、

『身延山史』が頼次とするのに対して『教団全史』では頼次の長男頼重が造立したとする点対立している。

これら日乾の能勢来村の年代及び清普寺建立に共通して関係しているのは、日乾の門人とされる日然である。

日乾来村元和三年説は『教団全史』に論ぜられる如く妥当性のないものである。故にそれ以前、『身延山史』に説くように遅くとも慶長十年には能勢に遊化していたものと充分推測できる。ではそれはどこまで遡及でき得るものなのであろうか。門弟日然が慶長三年春に能勢を訪ずれたという記述に注目し、そこからその師日乾が能勢に來た経緯とその年代、そしてまた清普寺建立について何か手掛りが得られないだろうか。

この疑問に回答するものとして『妙の見山』がある。本書ではまず『艸山集』日乾伝を引用したのち、その元和三年説を批判して、

（上略）乾上の能勢遊化は慶長の初年京都本山本満寺在住中にして、慶長七年身延瑞世の前にあり何となれば、元と能勢郡内は悉く真言宗たり。日乾上人の東道<sup>あんどう</sup>をして本郡に日蓮宗を草創したるは上人の衆徒にして本満寺末頭清普寺開基玉持院日然師なりとす。

清普寺記録に曰く慶長三年春能勢摂津守源頼次公、

然師の徳を感じ招待す、同六年当寺を建立して開基とす、同十年五月八日遷化

右の記録に依れば乾師来遊以前に然師既に遊化の途にありしは明なり

として、『身延山史』同様日乾以前に、日然が慶長三(一五九八)年春に来村していたことを清普寺記録をもつて論証している。更に日乾来村の経緯を説明して、

同記録に曰く、領主頼次就て法義を聴かんと欲す師の曰く領主の聴講に資するには我師日乾を招く可しと則ち日乾上人此地に来錫し盛んに弘化して領内挙て本宗に改転す 頼次然師の徳義を感じ慶長六年慈父清普居士菩提の爲め法名を寺号として当寺を建立し然師を推して開基とす

猶其他記録に清普寺建立を慶長六年三月と記載せるより考ふれば 乾師の来遊は前五年ならんか 然師慶長十年遷化及び大旦那村豊忠入道は既に慶長七年十月六日卒す清普寺に葬るとあり 元和三年に先つこと十数年の前にあり 更に探り得たる考証を例して史家の参考に資せんか

旧家西山家の秘蔵に係る『同家系譜』『同家由来』を関す同様左の如き文字あり

慶長五庚子関原合戦武者所某出陣す

身延山二十一世京都広布山本満寺十三世寂照院日乾上人請待す

慶長十乙巳稔九月十八日西倉善谿寺にて真言替宗法華宗門に相改也(中略)

依て思ふに慶長五年九月関原合戦の功績により拾九年間島津領たりし旧地を回覆し摂津守に任ぜられしは頼次公なり 此の大慶事を迎へたる能勢頼次 或る傍より是を信仰喚発の動機なりと思惟す 先記に然師に依て法義を聴かんと欲すと故なきに非ざるなり。

惟ふに乾上の来遊は慶長五年ならん 而し右の文字に身延山廿一世とあるは 慶長七年身延瑞世の後に記せし者のならん 古人の其人の徳操を主として年代等に関せざる其例少なからず 深く警むるに足らず 按ずるに元和三年は乾師身延再住退隱の後にして 能勢留錫の砌ならん

(以上原文のまま)

長文の引用になったが、文中引用の史料は現在散逸してしまつたもので貴重である。なお西山氏文書は『東郷村誌』でも引用されている。さてここで(一)慶長三年春玉持院日然来村、(二)同五年日然を介して日乾来村、(三)同六年

三月清普寺建立、とされている。これらについては『東郷村誌』もほぼ同様の内容を伝えるが、(一)に對しては、

(上略) 旧書類を総合するに、玉持院日然上人、慶長五年に初めて本村に来錫

としている。ここにいう「旧書類」が何を指すのか不明確であるが、頼次は旧領地を関ヶ原戦役の功によって復し、それ以前は能勢の地を離れていた故に、旧領復帰の前に日然に法説を聴くべく招待するはずはない、との論旨であるならば、それは妥当とはいえない。頼次は旧領を復す以前天正年間に既に能勢に戻っているのである。

これは天正十九(一五九一)年に頼次が能勢に帰り、この地の布留神社を再建し、その棟札が現存していることから証明できる。従つて日然能勢来村慶長三年春とする説を妥当性あるものと認める。

尚、日乾来村が弟子日然に依るものであることは、他に批判を見ないが、この日然の来村についてつけ加えれば、『能勢物語』に、

此玉持院能勢郷ニ来臨之所縁ハ当邑齊院ノ庄ノ百姓某櫛ヲ売テ広布山へ出入ス 此者ノ縁ニ依テ当郷へ宗門弘通之為ニ来リ給ヒシカ法徳厚キ上人ナレハ安入深ク寄依シテ言上招請スル処ナリ

ここにいう安入とは『妙の見山』にいう清普寺大旦那村豊忠入道のことで、『能勢物語』『能勢東郷志』によると、能勢家の老臣であり、頼次が能勢を逃げのびた時、この地に留まってあとを守った人物である。この安入の紹介によって頼次が日然に接することは、充分考えられるところである。

それでは日乾の能勢来村は、日然にのみ依るものなのであろうか。これについて『能勢物語』に興味ある文が記されている。

(上略) 京都広布山本満寺ノ寺家玉持院本行院等案内ニテ甲州身延山久遠寺二十一代目ノ貫主寂照院日乾上人法花宗門弘通ノ為能勢郷エ来臨シ玉フ 則倉垣村楽師寺ニテ始テ説法シ玉フ 高德ノ上人タルニヨツテ頼次公甚々寄依シ玉フ

この倉垣村楽師寺は、後の来成山本縁寺のことである。では何故日乾はここで説法したのであろうか。当時頼次は地黄に居たのであるから、倉垣で説法するに便のよいことがあったと考えられる。ここに日乾を案内したのが、玉持院日然と「本行院」とされている。そこでこれを検討すると、「当能勢惣門中留記」に倉垣永昌山妙法寺の中興開基本行院日運が出てくる。この日運は日乾と早く

より道交があり、また日乾の法弟心性院日遠から本尊を授与される(11)など、日乾との関係は深く、同書にいう「本行院」に年代の上からも合致している。妙法寺については今は割愛するが、もと真言宗永昌庵と称し、後法華改宗されている。日運は初め了因房と称し、倉垣村の隣村長尾北田氏の出で、日乾の弟子であったが、この寺が無住になるにつき、檀中一同の帰依により当山に入り、自ら中興と称した(12)。当山には開基当時の両尊四菩薩像が現存するが、これには各像の台座裏に日乾の署名書判が認められる。「当能勢惣門中留記」によると、慶長二(一五九七)年了因房日運代のものである。また長尾村題目講には同年の記録が見られ、この頃法華信者のあったことが判る。従って日乾はこの頃既に、日運を紹介して能勢地方とのつながりを持っており、来村していたことも充分に考えられる。但し頼次と接触を示す史料は慶長五年を遡って見ることはできない。

さてここで、以上見てきた日乾来村の経緯を整理してみると、まず能勢倉垣村にて日乾の弟子本行院日運が檀中の帰依を得て妙法寺(当時の寺号は不詳)に入山。次いで慶長三年春齊院の庄の百姓某の縁で玉持院日然が来村して地黄を中心に弘教し、能勢家の老臣旬村豊忠の帰

依を得、その仲介で頼次と接することとなった。そして日然や日運の案内により、日乾が頼次に説法することとなった。それには日乾自身が前から関係をもっていた倉垣が最も都合が良かったことであろう。そしてその年代は西山氏文書に従えば、慶長五年のことで、関ヶ原戦役の功により徳川家康から旧地を拝領した十月朔日(13)以降のことであろう(14)。尚附説すれば、この時の説法の場即ち後の本縁寺は、日運との関係でか妙法寺の支配するところとなっている(15)。

かくして頼次は日乾に深く帰依することとなり、翌慶長六年能勢氏菩提所である清普寺を建立し日乾が開眼供養している(16)。また玉持院日然は開山とされ、旬村入道安入は仲介の労をもって開基檀那とされている。更に妙法寺についても、頼次は寺領を寄附し、日乾は同年閏十一月三日に妙法寺常住本尊を書いている。尚『教団全史』では清普寺建立を頼重としているが、当時の頼重の領地は未だ地黄にはなく(17)、また清普寺記、「能勢家由来旧記書拔」等にも、頼次の建立としている。以後頼次を中心に、能勢氏一族の領内は次々に法華寺院の建立を見るのである。

それ以前は真言宗の圧倒する能勢において、能勢法華

の成立——個別的に見るとき法華寺院の建立として認識される——は真言宗から法華宗への改宗の作業の過程として把握できる。この改宗への流れの中に、日乾の布教の大きいなる影響力を見るのであるが、清普寺の場合同様に、自ら開山とされる寺院は今わずかに真如寺・安穩寺・円珠寺をみるに過ぎず、他は悉く弟子門人に委ねている。自身本満寺の貫首である身を思えば、それもまた当然であつたかもしれない。ともあれ、「当能勢惣門中留記」に、日乾来村以前より在った本隆寺末の持経寺と、本山の支配を受けぬ無本寺跡の真如寺とを除いては、能勢氏領内の寺院は悉く本満寺末であり、しかも日乾来村以降慶長・元和の開創がほとんどであることを見れば、全てこの一門をもつて教線拡張に当り、自身陣頭に立つて指揮していたものであることが判る。また多数の寺院や、講中檀信徒に授与した本尊が伝えられていることは、日乾の布教の活発であり積極的であつたことを示している。

ところで天正年中（一五七三〜九二）本隆寺第二祖日鎮の高弟といわれる智願院日玩は、能勢氏の傍系（頼則の曾孫）<sup>(18)</sup>頼高の帰依を得て持経寺に住し、能勢頼之の葬儀を行なうなど能勢氏との接触を既に持っていた。

それにもかかわらず、後から来た日乾門下に圧倒され本隆寺派の伸びなかったことは、改宗の流れをつかみ、これに乗るための要素を欠いていたといわねばならない。そしてこの要素とは、持経寺日玩を頂点とみれば、その裾野の広さと考えられる。その意味で、日乾の一門は好機をつかむにその要素を持っていたのである。

かような観点から、玉持院日然と本行院日運の果たした役割はまた高く評価されねばならない。日運はその出生地であることの利点を以て能勢の地に法華信仰を根づかせ、また日運を通じて日乾はすでに能勢につながりをもっていた。一方日然は老臣匂村入道安入を介して頼次に接し、これを通じて日乾は頼次の外護を受ける。ここに至って日運・日然の動きは更に活発化し、妙法寺・清普寺等の建立、改宗の流れは急速に進む。以後日乾と弟子達の下に法華勧請される寺院ができ、あるいはまた妙円寺の如く先から住していた真言僧を説伏改宗させそのまま法華改宗した寺院もある。これら法華寺院の成立増加は初期の日乾を頂点にした日運・日然そして外護者頼次で構成される裾野が広がっていくパターンとして認識できる。そして日運・日然はこの構成にとつて必要不可欠の因子で、能勢法華成立において重要な存在と認められ



ねばならない。

尚附説するならば、『教団全史』では頼次の帰依の直接の機縁として日乾の祈雨が説かれているが、これはいま見た通りである。ただ『仏祖統紀』『艸山集』等にも述べられているように、能勢法華の成立における画期的な事項ということはできる。今能勢にはこれを伝える史料がないことは心残りであるが、『艸山集』という龍ヶ淵は野間中村にあり<sup>19</sup>、そこに一字を建立、今の龍淵山円珠寺であると伝えられている。また同寺記に、慶長六年四月開山日乾とされている。いづれにせよ農民社会で早魃は重大事であり、祈雨をもってそれに応え、同時に布教の手段としたことは充分考えられることである。

## 二 能勢氏の法華信仰

外護者頼次は、どのようにしてかくも熱烈な法華信仰をもつに至ったのであろうか。その理由の一つは、頼次は祖先伝来の法華信仰を受けついでいたことであり、今一つは頼次自身が、領地没収、家系存亡の危機を乗り越えることができたことである。これらを探ることににより改宗への流れともいえるものを、以下において明らかに

したい。

### (1) 備前における能勢氏の法華信仰

『教団全史』は、頼次の祖父頼明以来法華信仰が続いていることを明らかにしている。それでは能勢氏の法華信仰はどこまで遡及できるだろうか。以下、暦応年中以来のものであることを論証したい。

頼次は明智光秀に加担し織田信長を本能寺に打取ることを助けたが、その後後に秀吉により能勢を追われることとなった。『能勢物語』はこれを詳しく語るが、この時備前へ落ちたとする。『東郷村誌』は更に、備前国岡山の妙性寺に隠れたとしている。この「妙性寺」は、「能勢家由来旧記書拔」に、

慶長五年十二月十九日、能勢伊予守源頼次今日祖父先  
因幡守御忌日ニ仍テ、清普庵江参詣ヲワシマス

牌前

道藩居士 俗名皇太后宮大進多田左衛門尉源頼定入道、  
康永二年八月十二日備前国福岡妙光山妙性  
寺葬

善定居士 俗名能勢判官太郎頼仲年月日不相知、自  
是四五代妙性寺ニ葬、故不委

(以下略)

即ち「妙性寺」は、頼次の先祖頼定・頼仲等の葬地とな

っている。

『備陽国誌』に、岡山二日市町に京都妙覚寺末明光山妙勝寺があり、創立年代は不詳だが、「能勢修理太夫宇喜多直家の崇敬によって建立」され、能勢修理太夫頼吉の墓があるという。同じ能勢氏に関係深く、「妙光山妙性寺」はこの明光山妙勝寺のことであることは疑いないものであろう。更に頼次の落ちのびるだけの縁の深いものであり、妙性寺開山大覚<sup>20</sup>の遷化した貞治三（一三六二）年以前に能勢氏の家系中頼次と縁浅からざる人で法華信仰を持つ人がいたことになる。

かような妙勝寺に葬られたのが「皇太后宮大進多田左衛門尉源頼定入道」と「能勢判官太郎頼仲」及びそれ以後四五代の人たちであるが、同じく法華信仰を持っていたことは想像にかたくない。更に『備陽国誌』によると

松寿寺 浜野本寺京都本能寺・尼崎本興寺  
寺中本性院

暦応四年多田入道建立すといふ。

この多田入道は、前述多田左衛門尉頼定入道と同一人物と考えられる。そして暦応四（一三三一）年松寿寺を建立する程の法華信仰をもっていたことが判明した。また同書に、

三番町。今黄門山瑞雲寺（金吾中納言秀秋の法名瑞雲院の号によるべし）日蓮宗。  
本寺房州小湊誕生寺。

暦応年中能勢太郎左衛門頼仲建立し、寺領三百石を寄附、（以下略）

これも能勢判官太郎頼仲のことで、暦応年中（一三三八～四二）に法華宗寺院を建立し、法華信者であったことが判る。更にこれらを裏づける記録が松寿寺過去帳<sup>21</sup>にみられる。

大覚和尚 貞治三甲辰 暦応四年八月十二  
四月三日 多田入道頼定道譜居士

暦応四年当寺草創之本願  
清和天皇拾四代之嫡孫能勢太郎 宗譜大居士  
判官頼仲

ここで頼定の没年が「能勢家由来旧記書抜」と二年合わないが、どちらかに誤記のあったものであろう。ともあれ法名に至るまで同じである点同一人物に相違ない。また頼仲については法名は異っているが、太郎判官頼仲である点疑問はない。かくして松寿寺開山大覚に、ともに帰依していた頼定・頼仲の姿を知るところとなる。また「能勢家由来旧記書抜」に对照してみると、頼定・頼仲は共に頼次の直系の祖と考えられる人物で、その直系の祖に古く暦応年中より法華の信者がいたことが認め

られるのである。

松寿寺過去帳により開基は頼定と考えられるが、本願主とされる頼仲は頼定とどのような関係にあるのだろうか。

『寛政重修諸家譜』によると、頼定・頼仲は頼次の直系で、親子とされている。これは前掲各史料にも合致している。

ところが年代の点で問題が出てくる。即ち『寛政諸家譜』に頼仲が寛喜三（一二三一）年十一月十二日頼経將軍より本領安堵の御教書を賜り、仁治三（一二四二）年三月二十一日弟清経の采地を賜うべき下文を与えられたとあるが、これは暦応年中（一二三三〜四二）松寿寺・本行院を創立したとする先述の説に約百年のギャップを以て対立するところとなる。しかもこれら二つの事項は「將軍藤原頼経下文写」<sup>22</sup>「將軍家政所下文写」<sup>23</sup>によって裏づけられるものである。かくして本書の頼仲そしてその父頼定は先に見てきた人物とは合致しないことになってしまう。

では松寿寺過去帳に頼仲が、清和天皇拾四代之嫡孫とある点についてはどうだろう。これは『寛政諸家譜』では十二代となる。また『続群書類従』等では、家系のつ

ながり方に異同が認められるものの、やはり十二代である。それならば偶然別人の頼定・頼仲がいたのであろうか。前掲各書並に『尊卑分脈』等においても、当該事項に関係すると覚しきこれらの人物は見当らなかった。ところが、真如寺所蔵の能勢氏系図によれば、十四代であることが確認できる<sup>24</sup>。即ち系図編纂の上で十四代とするものもあるわけ訳で、いまここで確定することはできないのである。

頼定が多田姓を名乗っていることも右の諸系譜と異なる点である。そこで『姓氏家系大辞典』をみると、

備前の能勢氏 御野郡の豪族也、多田の条を見よ。岡山  
の法華宗妙勝寺、本行院等は此の氏の開基也。

とある。次いで多田氏の条に、

備前の多田氏 国誌に「多田入道（摂津源氏、御野郡の住人）は元弘の乱に宮方にて、軍忠を尽し、建武の乱に尊氏、此の多田入道を頼まれけれど、我れ老いて望みなしと云ひ、自殺すること太平記に見ゆ。其の子太郎判官吉仲は武家に属し能勢氏を称し、岡山の法華宗妙勝寺、本行院等は能勢氏の創立と曰へり。浜野の松寿寺も多田入道の邸址と伝へたり。」など見ゆ。

とされている。ここに多田入道建武の乱（二三三四）に際し

自殺とあるが、文中引用の『太平記』は物語である故、松寿寺過去帳の暦応四（一二三十一）年卒とする説を否定するものとは考えられない。また頼定の子吉仲については、松寿寺過去帳にみるように、頼定と頼仲は縁の深いものであり、親から子に名の一字を受け継ぐ通し字の風習は古くより認められるものであるし、更に語調が吉仲・頼仲と酷似している点、本書の吉仲は頼仲のことである。即ち頼定の子は頼仲であろう。

さて本書にみる所説は、頼仲から能勢氏を名乗るとし、他の諸系譜とは全く相違することとなり、逆に先述の松寿寺過去帳、「能勢家由来旧記書拔」並びに『備陽国誌』とは年代及び諸事についてよく合致するものである（年代に即してこれを暦応説という）。これら相對する兩説は共に根拠あるところで、これを説明するには、家系そのものについても充分な調査研究が必要かと存するが、これは今後の研究に期するところとし、今は暦応説を採用。『東郷村誌』に「多田五代記」の所説に従うことを前置きして、能勢の統治者を列記してある。その中に、

（上略）

多田入道

源頼定 後醍醐天皇に奉仕

能勢判官代修理亮

源頼仲 足利尊氏に属す

とある。まず頼定については、後醍醐天皇は文保二年から暦応二年まで在位しており、またこの天皇についていたことは、元弘の乱で宮方ということになり、暦応説によくなじむ。頼仲に関しても同様で、『姓氏家系大辞典』とも合致する。また頼定・頼仲は清普庵に頼次の先祖として祠られており、ここは暦応説に従って以下論じていく。

当時備前は大覚の弘教の活躍舞台であり、頼定・頼仲父子はこれに帰依し法華信仰を持ち、松寿寺を建立し、また本行院を建てたのである。更にまた同族の能勢修理太夫頼吉も、年代は不詳だが、同じく大覚に帰依して妙勝寺を建立したと思われる。「能勢家由来旧記書拔」に従えば、この妙勝寺に頼定と頼仲も祠られており、頼仲以後四五代は妙勝寺に葬られることとなる。かような妙勝寺は、いわば備前における能勢一族の法華信仰の中心になっていたものである。後世頼次が妙勝寺に隠れたのもこのような背景を鑑みれば、充分に理解し得るところである。また頼仲以降四五代が妙勝寺に葬られていることは、法華信仰が続いていることを示すものである。

これ以降は、頼次の祖父頼明に至るまでは記録に顕わせず、葬地も明らかにされていない。しかし実は頼則、その子思頼之、更に頼則の曾孫頼高といった、頼次の傍

系同族に代々法華信仰の続いていることは持経寺の縁起と照して証明することができる。そして頼次が頼仲から六代後になる(25)ということは、能勢氏に頼仲以来連綿として、法華信仰の続いていることを傍証するものである。更に頼次の血を引く大南・河崎・早崎・河合等能勢家の重臣の多くが持経寺の檀家となっていることは、法華信仰の深く浸透していたことを示すものでもある。但ここでは紙数の関係で持経寺についての所論は、割愛させていただく。

頼次の祖父・父の法華信仰も、かくして頼仲以来のものであることが判明した。それでは頼次の兄弟についてはどうだろうか。ここで問題とするのは『寛政諸家譜』に、

某 金剛院 僧となり、東寺の別当実相寺の住職たり。とする人物である。東寺の別当であれば真言僧であったことになる。しかし実相寺は、実は大覚の開基による妙覚寺の末寺なのである。清普寺過去帳裏書に、

上鳥羽村実相寺

慶長の始家康公大阪ヨリ御上洛ノ序実相寺江御立寄アッテ御休息アリ 洛妙覚寺末大覚大僧正開基也 住持金剛院御目見へ被レ至仰ニハ貴僧出生イツレント御上

意アリ 其時拙僧義ハ能勢郡出生ノモノ也ト御答申上ル 重テ問テ曰能勢十郎兵衛ト申者存ラレ候ヤト仰ラル サン候其ノ十郎兵衛ノ舍弟ニ御座候ト申上ル 爾ラハ其十郎兵衛コソ存命候ヤト仰ラル 御答申上ルヤウハ其十郎兵衛コソ相果候ヘ其舍弟ニ助十郎ト申テ兄十郎兵衛ニ器量歳智勝レリト存候モノ罷仕候 仰ニハ其助十郎コソ頼母敷候ト上意アリ

文中十郎兵衛とは頼次の兄頼道で、助十郎は頼次のことである。この時の金剛院の縁をもつて後頼次は家康に仕えることになったとされており、正に頼次の能勢領復帰の契機ともなるもので、後の参考のため全文を引用した。これによれば、金剛院は法華僧ということになる。またこの文と同意の文は『能勢物語』にも記されており、信頼できるものである。更に妙覚寺末ということに関しては、寛永年度末寺帳日蓮宗妙覚寺之帳に、鳥羽実相寺が確認できる。

かくして、能勢氏は古く暦応以来法華宗を信仰し、天正の頃には持経寺にみられる如く一族家臣においても法華信仰は浸透し、頼次の弟金剛院のように出家僧まで出る程であった。かような状況にあっては、頼次も当然日乾来村以前から法華信仰を持っていたものと、いうこと

ができる。

## (2) 頼次の法華信仰

能勢頼次は天正八（一五八〇）年九月、十九歳にして家督を継いでいる<sup>(26)</sup>。天正十年六月本能寺の変に際し能勢兵太夫頼良以下五百の兵を指向け、ために豊臣秀吉に脅かされることとなる。かくして家臣二三人と共に、祖先伝来の地を離れ、領地を没収され、一族の興亡を一身に背おって、備前妙勝寺に落ちのびた<sup>(27)</sup>。ここにとどの位留っていたかは不明であるが、後更に大和郡山城主羽柴秀長の許に行き、家臣と共にこれに属した<sup>(28)</sup>。天正十九（一五九一）年正月二十二日羽柴秀長が卒し、頼次はこの春能勢へ帰っている<sup>(29)</sup>。この時の能勢の荒廃は相当なもので、寺社は悉く焼払われていたことが『能勢物語』に見られる。布留神社も例に洩れず、同年九月二十八日頼次はこれを再興している<sup>(30)</sup>。

慶長四（一五九九）年正月十二日、徳川家康に召されて、小姓にとりたてられ<sup>(31)</sup>、以後伏見騒動、会津征伐、関ヶ原戦役等で家康についてよく戦功をたて、慶長五年十月一日ついに、能勢郡内にて地黄・野間・田尻等の村合せて本地三千八百石七斗余りを知行することとなり、旧領を復するに至る<sup>(32)</sup>。またこの時、宿野・今西・長谷

等二十一ヶ村六千八百六石七斗余りを預り寛永十一（一六三四）年まで支配する<sup>(33)</sup>。尚先の会津征伐の軍功を認められて、倉垣・切畑及び丹波桑田郡内北之庄村等合せて三千三百石余を賜っているが、これは後に子息達に分与している。

以上頼次の半生をざっとたどってみたが、ここには能勢法華の成立を暗示するものはいくつか見られる。まず第一に、頼次が備前妙勝寺に居たことである。次に、布留神社に見るごとく、領内が戦火に会って荒廃していたこと、更に家臣で領内に残っていた者も多くあったこと、などである。領国を落ち延びて妙勝寺へ辿り着いた時の頼次の心境はいかなものであったろうか。長く続いた能勢の領知支配は、まさしく自分の代に断ぜられてしまった。再興を願う気持は何にも増して強く、固いものであったろう。それが先祖の葬地へ来るに及び、ひたすら祈る心へと変っていったのは、当然のことである。古くからの法華信仰を受継ぐ頼次が、妙勝寺に至ったとき、この信仰もまた高まっていたものと察する。後に旧領を復し帰国するに至って、この喜びはまた信仰の心を深めさせた。その頃の能勢の家中は、持経寺に見るように法華信仰を持つものも多く、旬村入道安入のようにみず

から日然に接していく者もいた。またこれより早く、永昌庵の如く法華改宗された寺院もあり、更にその後日運に帰依して題目講も結成されていた。かような時期に旬村入道安入の仲介で、頼次は日然に接したのである。進んで法説を聴きたくなったのも当然であり、気紛れでもなんでもない。かくして日乾が説法することとなったのである。頼次と共に諸国を巡り共に苦勞した家臣達、また領内に留まって主家の再興を待ちわびた者達も、主と同様の心境のうちに法華に帰依したことは、これもまた自然の成行であらう。

戦火を経て社寺は荒廃している。菩提所清普庵も慶長五年末には、見る影もない程であった。かくして翌年清普寺の建立をはじめ、領内あげて法華寺院を建立していくのである。頼次に至って、能勢氏の法華信仰は一つの頂点に達していったものといえよう。

のち頼次は日乾に山屋敷合せて東西五町、南北六町を永代寄進し、日乾はここを隠居所とし覚樹庵と名づけ、能勢における布教活動の拠点とした。口伝では覚樹庵は真如寺の前身とされているが、これについて附説すれば元禄五年十月の寺社相改吟味之帳<sup>(34)</sup>に、

(上略)真如寺往古真光寺と云ふ旧跡亦廢地に候処先

能勢摂津守東照神君の爲御報恩身延山久遠寺二十一代日乾上人へ寄進有之元和三年丁巳開基日乾十九年在住(下略)

また『能勢物語』等にも同様に記されており、覚樹庵と同時期に建立されていることになる。更に「能勢家由来旧記書拔」中の寛永三年頼次臨終に及んでの遺言に、

(上略)無漏山真如(寺)家門守之、大神君ノ奉祈御威光増益、天下安全ノ御祈禱ヲ可修無解怠旨下知ヲ加へ可奉御厚恩報也(下略)

として、真如寺建立の趣旨が認められる。日乾寂後は、覚樹庵・真如寺ともに無住で、延宝元(一六七三)年十一月寂明院日侃が入山するまで続く。尚この代に本寺の支配を受けぬ、無本寺に真如寺はなったようである(元禄五年寺社相改吟味之帳、真如寺四世常寂院日近の元禄三年自筆本尊側書による)。これによって「当能勢惣門中留記」等にも、触頭の支配を超える故、掲載されていない。ただ覚樹庵は、正保二(一六四五)年三月十八日再興の棟札が現存するのみで、以後の記録はない。或いは真如寺に含まれたものとも考えられるが、今後の課題としたい。また能勢妙見は、日乾が頼次の長男頼重に、自身の創案による妙見尊像を授与し、大空寺城址に安置

したのが初めという（『妙の見山』）。この現在まで伝わる妙見の尊形が、日乾の創案にかかるか否か即断はできないが、妙見山所蔵日乾自筆の寛永三年六月三日染筆の本尊には、中尊首題下に妙見尊像が描かれており、少なくとも今の姿は日乾により能勢に伝えられたものといえよう。かような日乾との関係で、以後妙見山は、代々真如寺主僧の受持するところとなっている。

註

- (1) 清普寺所蔵。延享二年十一月作成。能勢門中各寺の由来等を触頭の清普寺がまとめたもので、本隆寺末持経寺と無本寺跡の真如寺は記されていない。他は本満寺末である。
- (2) 明治三十六年三月二十一日発行。清水麗昇の協力により関日鑑編纂。
- (3) 大正五年十二月十日大阪府豊能郡東郷村発行。山田文造編。
- (4) 野村耀昌稿。『近代日本の法華仏教』所収。
- (5) 影山堯雄著。
- (6) 立正大学日蓮教学研究編。
- (7) 『東郷村誌』にその伝あり。尚日乾自筆の覺樹庵棟札（真如寺に現存）は元和三年九月三日の草創としている。
- (8) 菱沼哲之介著。大正元年十月十日発行。

(9) 注(7)を参照。

(10) 身延山久遠寺編纂大正十二年八月三日発行。

(11) 妙法寺所蔵日遠本尊。慶長十年七月三日了因房日運に授与されている。

(12) 妙法寺寺記。

(13) 『寛政諸家譜』「能勢家由来旧記書拔」。

(14) 『妙の見山』は清普寺建立慶長六年三月を根拠に、前年日乾来村としているが、同寺建立は「能勢家由来旧記書拔」では同年秋で日乾の開眼供養は十月二日とする。しかし同寺の建立と日乾来村を結びつける必要はなく、また「能勢家由来旧記書拔」に同五年十二月十九日頼次が清普庵へ参詣しその荒廃をみて一寺建立を決意、とあり日乾への帰依後のことであると察せられる。ここは西山氏文書に従う。

(15) 「当能勢惣門中留記」

(16) 「能勢家由来旧記書拔」に十月二日とある。

(17) 『寛政諸家譜』「能勢由来旧記書拔」『能勢物語』『能勢東郷志』、清普寺記。

(18) 持経寺過去帳裏書

(19) 『東郷村誌』にこの伝あり。

(20) 『日蓮宗大観』による。

(21) 松井孝純師による。ここで師に深湛の感謝の意を表する次第である。

(22) (23) 東京大学史料編纂影写本書上古文書二によるもの



で、『能勢町史』所収を引用す。

(24) 同系図の略図を示せば次の通りである。

清和天皇——貞純親王——経基王——満仲——頼光——頼国——

——国房——国直——国基——国能——重綱——頼定——広経——頼仲

(25) 『寛政諸家譜』

(26) 右の書、『能勢物語』等

(27) この時、能勢に残っていた家臣も数多くあり、匂村入道  
安入もその一人であったことが『能勢物語』『能勢家由来旧  
記書抜』に記されている。

(28) 『能勢物語』『妙の見山』『東郷村誌』

(29) 『能勢物語』布留社棟札

(30) 右の書、布留社棟札等。

(31) 前掲各書並に清普寺過去帳裏書等。

(32) (33) 『能勢家由来旧記書抜』

(34) 元禄五年江戸幕府の命により作成された末寺の調べであ  
る。今これも散逸しており、ここでは『東郷村誌』所引のも  
のを使用す。

# 「能勢法華寺院一覽」

日乾自筆末寺帳・寛永年度末寺帳・「当能勢惣門中留記」  
・本満寺三十九世至信院日聰代本満寺末寺帳に記載の寺  
院を掲げる。所在地は「当能勢惣門中留記」により、こ  
れにない寺院はそれを記載する書に従った。故に現在の  
住所表示ではない。また創立(改宗)年代は「当能勢惣  
門中留記」と『日蓮宗大観』寺記等を照し、妥当する年  
代を記した。順序は「当能勢惣門中留記」による。

寺院名	日乾寛永留記	日聰	開山	創立(改宗)年代	所在地
清普寺	○	○	玉持院日然	慶長六年	地黄村
妙法寺	○	○	本行院日運	慶長六年 但シ日乾本尊	倉垣村
本縁寺	○	○	不詳(日運?)	慶長十年 但シ西山氏文書・日乾本尊	倉垣村
神宮寺	○	○	不詳	寛永十年 但シ日乾本尊	妙法寺によ る支配寺

円珠寺	法性寺	妙円寺	蓮華寺	長久寺	正林寺	興德寺	安穩寺	善徳寺	法華寺	善福寺	妙華寺	涌泉寺 (神宮寺)	恵照寺	法善寺 (神宮寺)	示現寺 (神宮寺)	布留社 神宮寺
○					○											
○					○											
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
寂照院 日乾	玉持院 日然	発心院 日慶	妙寂院 日深	正林院 日久	慈眼院 日秀	大運院 日意	寂照院 日乾	善中院 日空	正存院 日久	正玄院 日得	善行院 日言	法性院 日侃	妙法坊 日玉	法善院 日貞	蓮葉坊 (八世円信坊は 転寺号は)	学照坊
慶長六年	慶長九年	慶長元年建立真言寺 改宗慶長年間(年月不詳)	元和二年	元和三年 但シ頼次より御免地	寛永六年	慶長十年 日乾本尊	慶長六年	不詳(開山日空元和九年寂)	元和の頃	慶長八年	元和七年	寛永六年	不詳(開山日玉元和二年寂)	慶長十年日乾、本尊ヲ日貞に授与 慶安二年日乾転寺号の本尊	不詳、但シ本満寺二十四世示性 院日昌(元禄六年寂)代に転寺号	元和年中(但シ慶長十年法華勧請 この頃の日乾本尊あり)
野間中村	切畑村	長谷村	今西村	下田尻村	倉垣長尾村	野間大原村	倉垣和田村	倉垣長尾村	野間稲地村	野間出野村	吉野村	倉垣長尾村	地黄村	山内村	山内村	地黄村

補註

- (1) 『能勢物語』一卷。真如寺藏。天保七年二月完。丹陽別院庄悟鳳斎著。頼次の一代記。
- (2) 『能勢東郷志』一卷。真如寺藏。天保五年完。孔陽子藤正義輯編、悟鳳斎源氏重補正。
- (3) 「能勢家由来旧記書拔」は『能勢町史』所収を引用す。

※日聰代末寺帳には他に、内宮寺・明神寺・辻善坊寺を列記しているが、これらは不詳で今は省略した。

成就院	覺樹庵	真如寺	本理庵	善苗庵	常妙寺	慈仁庵	善妙庵
○	○		○	○	○	○	○
		○					
大阪谷町本長寺 日嶺	寂照院 日乾	寂照院 日乾	不明	不明	不明	不明	不明
享保二十年	元和三年建立	元和三年 (『日宗大観』は 慶長五年)	不明	不明	不明	不明	不明
野間中村	地黃村	地黃村	地黃村	田尻村	倉垣村	倉垣村	倉垣村